

## 『点と線』：成長曲線と成長障害（低身長）

神崎 晋

鳥取大学医学部 周産期・小児医学分野

『点と線』は松本清張の長編推理小説で、一つの時点でのみ事象をみると解決できない事件が、時系列に沿ってみていくと事件の全容が把握でき事件が解決する。

小児の成長の評価も同じである。測定した時点の身長や体重が健常範囲でも、その1年前の身長や体重と比較することによって問題の発生を早期に見つけることが可能となる。例えば身長測定をした時点で身長が平均であれば全く問題無いと一般には判定される。しかしその小児が1年前に+1SDの身長であったとしたら、また逆に-1SDであったとしたら、現在の身長がその年代の身長の平均であっても全く問題無いとは言えない。前者では後天性甲状腺機能低下症（慢性甲状腺炎）や視床下部・下垂体の腫瘍を疑い、後者は思春期早発症の重要な所見である。両親の離婚を経験した児童の成長曲線は、離婚の協議をしている時期に一致して身長の増加が不良になることもある。保育園への入園が苦痛で身長増加が不良になった幼児もおり、炎症性腸疾患が身長増加不良を示すことはよく知られている。希ではあるが身長増加の低下が炎症性サイトカインを産生する腫瘍やクッシング症候群に起因した例も経験した。

このように成長曲線は、その子どもの身体的あるいは心身的な問題の存在を、他の症状が出現する前に表出することがあり、成長を常に成長曲線、点ではなく線で、評価することが重要である。学校保健において、平成28年度から身長と体重の評価に身長・体重曲線を用いるように推奨されている。学校保健で採用される身長・体重の成長曲線はパーセンタイル表示、すなわち同じ年齢の小児を無作為に100人集めた時、その人の身長・体重が低い方から何番目くらいに位置するかという評価法が採用される。一方、パーセンタイル表示ではその小児の身長・体重が平均からどの程度隔たっているのかが十分に評価出来ないという問題点がある。そのため医療では標準偏差 (SD) 表示の成長曲線が頻用されている。

新しい成長曲線を紹介するとともに、成長障害（低身長）をきたす主な疾患について述べる。